石見に残る古今の石の庭

「庭園文化研究分科会」　武 田 隆 司

１．はじめに

重森三玲は昭和を代表する作庭家であり、南北朝時代の夢窓疎石、室町時代の雪舟や江戸時代の小堀遠州といった巨匠と比較しても遜色ないといわれている。三玲のデザインは、「永遠のモダン」と表され、古典庭園の手法を活かしながらも、さらに高度な抽象的表現を加えた独特の庭の空間を創造するものであり、その著作は大正末期から昭和後期まで200を超えるといわれるが、個人庭園についてはほとんど紹介されていない。今年度の石見地方の視察では、三玲の作庭した個人庭園を２庭も訪れる機会を得た。中でも益田の地主であった小河氏の庭園は、三玲が最も心血を注いだ個人庭園とされ、多くの庭園書で紹介されている。小河氏庭園を訪れてもっとも心が引き込まれたのは、建物から見た庭の全景であり、それを構成する圧倒的な迫力の数百の石を使った石組であった。三玲は建築や調度品、茶道、華道などにも精通しているスーパー作庭家であるが、その特徴はやはり石組にあるのではないかと思う。一方同じ益田市内には室町時代に雪舟が作庭したといわれる、医光寺庭園、万福寺庭園のような名園もあり、これらの庭も特徴のある石組がなされている。500年を隔てて存在する日本を代表する二人の作庭家の石組について注目してみたい。

２．日本庭園の中での石組、景石の役割

日本庭園を構成する要素は、「水」（池や流れ等）、「石」（石組や景石）、「植栽」、「「景物」（灯ろうや蹲い等）の４つとされ、中でも石組が日本庭園の主役であり、その配置や組み方で庭の表情がかわってくるともいわれる。一般に１，２石単位で置くのが「景石」、石を組み合わせてものが「石組」、それらの総称が「石組」と呼ばれている。石組は、山や島といった自然の地物、鶴や亀といった生き物を表したり、また宗教的な意味の他、縁起や祝儀など様々な意味合いを持たせたりする、日本庭園の必須アイテムである。その種類を大別すると下表のようになる。

分類	種類	意味合い
神仙蓬莱思想にもとづくもの	蓬莱石組	古代中国、不老不死の仙人が住む山、島を表現。
	鶴島、亀島	長寿のシンボルとして対で設置することが多い。
仏教にもとづくもの	三尊石組	3つの石を組んだ日本庭園の石組の基本。釈迦と左右の脇侍を表現
	須弥山石組	古代インド仏教の宇宙観における山
その他祝儀の表現	七五三石組	古来中国では奇数が陽の数として尊ばれた。七五三の祝いの由来ともなる。
	陰陽石	子孫繁栄の願いを託した石

３．重森三玲とその石組の特徴

三玲の庭は基本的には古典的な庭園と同様に仏教、神道、道教といった宗教的なテーマによって創造されているが、江戸時以降になると古典的な庭園も形式や手法をそのまま踏襲するのみで、創作がほとんど見られなくなったことから、日本庭園を中心とした「日本的芸術」の復興を目指したといわれている。また彼の斬新な作庭技法は膨大な数の古庭園の視察、また茶の湯や生け花への造詣によるものといわれ、伝統的芸術の上に成り立っているといえる。特に古庭園の視察は、室戸台風による文化財被害を契機に、日本各地の 300 庭園の実測調査を行っており、失われゆく名園を記録しておくことの重要性を教えてくれる。三玲は「変化するのが庭、永遠に残る石組を中心に据え、植栽は補完的なもの」といっているように石組に力を入れていたことが分かる。文献に基づき三玲の石組の特徴をまとめてみる。

① 色彩

通常の自然石に加え、比較的鮮やかな色彩の石（鞍馬の赤石、阿波のの青石）、それに加えて苔の緑、敷き砂の白色等と様々な色が組み合わされている。小河家においても、青石の石組や色鮮やかな赤色の鞍馬石の敷石等が見られる。

② 素材

小河家庭園にも見られるように、阿波の青石（緑泥片岩）を使った庭が多い。この石は色鮮やかで光沢があり、自然石の場合も板状に近い直線的な形態であり、庭園の石組では立石として使われることが多い。正面から見るとボリュームが感じられるが、横から見ると軽くて直線的なイメージとなる。

③ 石組のデザインの特徴

三玲は、「テーマがないと庭園は単なる石や植物の寄せ集めになってしまう。またテーマは芸術作品にとって不可欠の要素であるが、その時代の人々の生活に必然性のあるもののみを選ぶべきである。」といっている。

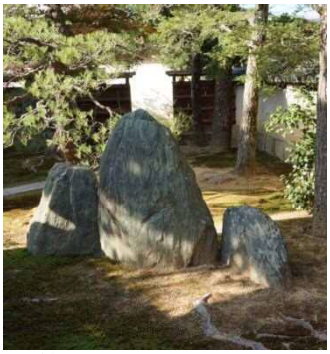
小河氏庭園（手前と奥の二重の石組は出雲から石見の連山をテーマにしている）

「永遠のモダン」と表されるとおり、より抽象的で、象徴的なデザインが三玲の特徴といわれているが、抽象度の高い庭から低い庭まで様々なバリエーションがあるようだ。抽象度が高い庭とは古庭園でいえは竜安寺の石庭などがそれであり、低いものはこの地方でいえば松江歴史館の枯山水の石組といったところであろうか。

竜安寺石庭の石組（抽象度高い）

松江歴史館の石組（抽象度低い）

今回の小河家庭園を見ても様々なデザインが見られる。写真下左は、典型的な古典的石組の三尊石である。一方写真中は一般的な石の置き方ではない。これは写真右（山口県漢陽寺庭園：三玲作）を見るとよりわかる。このように一見安定感がない石の置き方も「動きのある景色」を作り上げているように感じられる。


三尊石（小河家庭園）

動きのある石（小河家庭園）

動きのある石（漢陽寺庭園）

また、小河家庭園は回遊式の庭となっていることから、様々な角度から石組を見ることになる。前述の通り青石による石組は見る角度により極端に表情を変えるようだ。（写真）これも華道に精通した三玲ならではの「四方正面」の技術なのだろう。

庭園入口より（三尊石と4つの列状の石）

建物正面より（三尊石と4つの列状の石）

４．雪舟庭園の石組

三玲と雪舟庭園の関わりも深い。昭和12年に益田市内の雪舟庭園（医光寺庭園、万福寺庭園）を実測調査し、「日本庭園史図鑑」でこれらの庭園を広く世に紹介したことが縁で寺院側から切望され、昭和33年に２庭園の復元修理も行っている。これらの雪舟庭園と呼ばれる庭園は室町時代に画聖雪舟により作庭されたとされる。雪舟は50才の頃中国に渡り本場の山水画を学び、その際にいくつもの中国庭園を見たとされる。帰国後は現在の山口県を拠点にいくつかの庭園を手がけており、その庭は雪舟庭園と呼ばれ、深山幽谷の山水画の世界を庭の中に表現したといわれている。

中でもその石組様式が多くの庭園書に取り上げられている「万福寺庭園」の石組について、いくつかの専門家の解説を抜粋して整理してみる。

① 三玲は「日本庭園史図鑑」の中で、万福寺所蔵のふすま絵と庭を対比して解説している。「絵画の中央の楼閣付近→築山、楼閣の塔→中心石（須弥山石）、滝→枯れ滝組、舟着場→舟着石、背景の蓬莱山→蓬莱石、本庭の構成は所蔵の山水画と全く同一の様式であり、雪舟の作庭であることが有力とされる所以である。」

② 「礼拝石に座して眼前の須弥山を仏の化身と見立てて礼拝する実用の石組で禅宗庭園の厳粛な美しさが見るものの心をとらえる」（福田和彦「日本の庭」）

③ 「第1の特徴は、石を垂直に構成していることである。第2の特徴は石を縦や横に組んで石の三角形の稜線を強調する手法である。第3の特徴は長い石を護岸石に使っていることで、これも垂直線で構成される一連の手法である。」（重森完途＝三玲の息子「芸術新調」）

④ 「中央の鋭い立石は須弥山を表し、山後の集団石組と護岸石組、池は九山八海を象徴している。微かに振動しているようなある石組は緊張感を感じさせる。」（斉藤忠一「名園を歩く室町時代」）

万福寺庭園の石組

５．二人の石組の共通点と魅力

二人の庭の巨匠の石組など比べるのも無粋でおこがましい話であるが、これまでのいくつかの庭を見るとどことなく似ているような気がしてくる。それが何に起因するものなのか、甚だ個人的な見解ではあるが、少し整理してみたい。

まず二人とも画家出身であるということである。すなわち絵画の中に2次元の世界を創作し、それを庭という3次元の空間に置き換えて石を組む中で伝統的な古庭園の作庭手法にはない独特の世界を創造したのであろう。雪舟の水墨画は有名であるが、三玲も作庭にあたっては図面とともに日本画とも思われるようなスケッチを作成している。（下図参照）

小河氏庭園完成予想画（重森三玲）

万福寺所蔵襖絵（雪舟）

石の組み方については、前述のとおり、雪舟の石組が「石を垂直に構成している」、「石を縦や横に組んで石の三角形の稜線を強調する」また、「微かに振動しているようなある石組は緊張感を感じさせる」とされる。一方、三玲についても直線的な青石の多くを立石として使い、動きを感じさせるという点で類似しているのではないか。下の写真は雪舟の万福寺庭園と三玲の漢陽寺庭園の、ともに「九山八海」（インド仏教の世界観を具体化したもの）をテーマとした石組である。漢陽寺の石組は万福寺のものを参考にしたともいわれている。

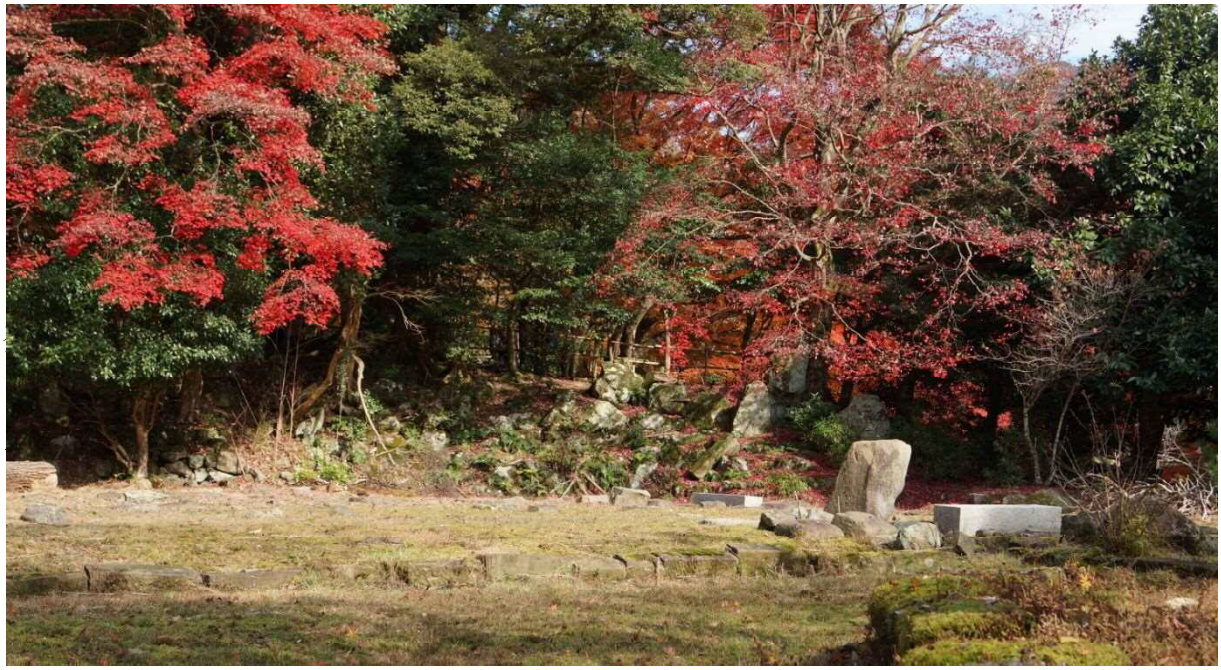
万福寺の「九山八海」の石組（雪舟作）

漢陽寺の「九山八海」の石組（三玲作）

６．おわりに

昨年度からの石見地方の視察によって、この地方には国の名勝となっている津和野藩主の庭や商家の庭園群、また室町時代の画聖雪舟の庭、それから500年を経て出現した昭和を代表する作庭家、重森三玲の庭が存在することが確認出来た。さらに出雲地方には地方独特の「出雲流庭園」群や禅宗寺院等の庭、そしてアメリカの庭園雑誌のランキングの常連となっている足立美術館庭園や八束の由志園など枚挙にいとまがない。島根県は京都をもしのぐ「庭園立県」といってもよいのではないかと思う。

重森三玲は「自分の娘を施主に預けているようなものである」「庭園は自然の材料をそのまま駆使して造形したものであるから、本当の意味で生き続けている芸術品である」「庭の保存、観賞のためには手入れや掃除を怠ってはならない」「手入れや掃除を楽しみながら自分でやれる人でないと庭を持つ資格がない」といっている。いかに庭の価値を保つために維持管理が重要であるかということであろう。しかしいつも心配になるのは庭の行く末である。維持管理の負担や価値観の移り変わり、技術者の不在などにより荒廃や消失の危機にさらされている。今後もこの貴重な地域資源を掘り起こし、光を当て、その保全と活用について考えて行く必要がある。



＜荒れ果てて廃墟と化した鰐淵寺是心院（出雲市）の庭、石組だけが残っている。＞

＜参考文献＞

・中田勝康（2009）：重森三玲　庭園の全貌

・重森三玲、重森完途(1963)：日本庭園史大系　現代の庭（三）

・神一倫道（1991）：万福寺誌